

初級英語学習者による詩作に関する考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 丸山, 修 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007869

初級英語学習者による詩作に関する考察

An Examination of Poetry Writing in English by Japanese Beginning Learners of the Language

丸 山 修

Osamu MARUYAMA

（平成 25 年 10 月 3 日受理）

Abstract

This paper aims to address how poetry-writing activities can be more effectively devised for beginning learners of English. For that purpose, the following topics are discussed: the position of poetry in the current curriculum and textbooks, the nature of poetic writing in general, the characteristics of poetry by learners of English in particular, and the steps taken in the process of their writing. On the strength of these observations, a proposal is made to make writing poems in meter accessible and attractive, which deserves much more attention as a catalyst for getting a feel of the language than it currently receives.

1. はじめに

本稿は、英語の仕組みの基礎的な理解を持った中学生を対象に想定した英語での詩作についての方法論的考察を目的とする。中学生でも適切な誘導によって英語で詩作ができることは、中嶋の実践に基づく事例集（中嶋ほか 2006）が証明している。ただし、詩作のプロセスが具体的に示されていなかったり、選ばれた詩がどの程度詩作を試みた母集団全体の質を正しく反映しているのかが不明だったりするため、方法論としては扱いづらい面がある。それでも、動機付けの点からは、詩を書くというあまり注目を集めることがない活動にも、一定程度以上の効果があることが窺える。これを特別視するかどうかは別として、詩作を促す発展的課題を載せている検定教科書もあるし、英語学習者を念頭に置いた初歩的な詩作の指導手順に触れた文献もある（原田 2005, 111-20、三浦ほか 2002, 160-76、Holmes and Moulton 2001）。しかし、いずれも詩を誰もが直感的に感じられるものと捉えていて、詩を書くことの諸相に深く踏み込んでいないように思われる。本稿では、詩の性質や特徴の理解を踏まえて、詩作が英語学習にどのような効果を持ちうるのかを考えてみることにする。また、議論を進めるなかで、初歩的詩作の指導にあたって触れられることがほぼ皆無である韻律（meter）に関して、一つの提案を試みる¹。

2. 詩作のシラバスの位置づけ

詩が高度な言葉の芸術であるという見方をすれば、相当程度の語彙や構文についての知識が

当然必要と考えられるため、少なくとも中級レベル以上の英語力が必要と推論するのも無理はない。宮地（2000）は、主として英詩を読むことの教育的意義に焦点を当てたなかで、中高生に詩作させることは、その難しさを自覚させる以上のメリットはないとまで言っている。その要因として「英詩の特質や英語という言語の特質がいかに関米人の思考や感受性の中に浸透しているか（同時にいかに日本人が日本語の思考や感受性に染まっているか）」（93）ということを挙げている。確かに外国語である英語を習い始めたばかりのごく平均的な学習者が詩を書くこととすれば、まず日本語で自分の心情を思い浮かべ、それに字義通り合うような英語の言葉を、しばしば和英辞典を用いて探し、それらを日本語の論理でつなげる、という手順を踏むことが予想される。推敲するなかで多少は洗練されて行くとしても、そうやって出来上がった詩は果たしてどこまで英語の詩と言えるのか、という疑問が生じることになるだろう²。しかし、未熟なものしか書けないから詩を書くことに意味がないというならば、それは詩についてのある種のエリート意識を反映した見解とも映る。教育的観点から重要なことは、詩を書くことに特有な条件をどのように理解し、それを実際の指導でどう機能させるかである。

ところで、詩作は書くことである以上、四技能のうちのライティングの活動に最も関連が深い。現在の中学校外国語の指導要領（平成24年度施行）では、「書くこと」の指導事項の一つとして、「身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちなどを書くこと」（22）が挙げられているが、これは何かを書く状況としてはごく日常的に起こりうるものである。ある程度の方向付けは必要であろうが、これを詩として書かせるという方法は指導上の選択肢として一考に値する。一方、指導要領の改訂で新たに「語と語のつながりなどに注意して正しく文を書くこと」（20）と「自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと」（22）が指導事項として立てられた。これらは、誤った形のコミュニケーション偏重の影響で、文法的に正しい英文を組み立て、つなぎことばや指示関係に注意を払って文章を適切に連ねて行く力が近年衰えてきている（あるいは、衰えているかどうかはともかく、そうした力がより重要視されつつある）ことを踏まえての内容である。詩作が、前述のように高度な言語操作技術を要するものであるなら、このようなまとまった文章を書く力とある程度関係があるという推測も成り立つ。これらの点を検討するにあたって、指導要領に則っているはずの検定教科書に触れてみよう。

授業のなかで詩作を行う決断の大きな要因としては、教科書で扱っているかどうかを挙げられるだろう。教科書に見られる詩作課題の例については丸山（2008）で触れたが、掻い摘んで言えば、俳句などの短いパターンやわかりやすい有名な詩をモデルとしながら、自分なりの表現を使って書かせるという傾向が見られる。*New Horizon*は、以前からパターンに則った詩作の発展的課題を収録しており、現行指導要領に合わせた最新版でも引き続き取り上げている。具体的には、5行からなり、それぞれの行が指定の語数で指示された内容を表すような詩で、2編の例が示されている。以前の論考で取り上げなかったほうを引用する。

Rainbow
 Many colors
 Across the sky
 The sky is smiling
 Peace (82)

確かにこの詩の内容は、特に後半は情緒的であると言えよう。一方、英文の形式的特徴として

は、一見してわかるように、4行目を除いて各行が文末満のフレーズまたは単語のまま独立していて連結がなく、これだけ短いにも関わらず、“many”という漠然とした数を表す語を使ったり、“the sky”をむやみに繰り返したりなど、モデルと言うには雑な印象は拭えない。とは言え、この課題の目的は、質を云々するよりも、「気持ちを短いことばで書こう」（同所）ということである。こうした短詩をモデルとする場合、最も重要視されることは、説明を加えて文章を明晰にすることではなく、言葉を削って含みを持たせることだと考えてよいだろう。そのようにして書かれた詩は、書き手の気持ちを伝えることはあるかもしれないが、すべての読み手がその含みを汲み取ることが出来るわけではなく、伝わったとしても、ある意味で根拠のない偶然の結果かもしれない。したがって、このような詩は理路整然とした文章のライティングと同列に扱うことはできない³。

上の例はパターン詩であるという点も影響しているが、あえて不完全さを目指す言葉の使い方が、詩では比較的許されたり積極的に期待されたりすることも事実である。また、表面上不完全でなくても、あるいは平易に見えても、その詩が明晰、つまり意図がはっきりと確定できるというわけでもない。詩作には、そうした独自の論理が働くことを踏まえた上で、どの部分が書く力の伸長に関わるのかを見極める必要がある。次節では、詩の論理についてももう少し踏み込んで見て行くことにする。

3. 詩のフォーム

何をもって書かれた文章を詩と呼ぶかは、通俗的な理解から記号論・文体論的説明モデルまでさまざまな考え方があがるが、詩を意味内容よりも表現方法に重きが置かれる文章と捉えるのが最も手堅い方法であろう⁴。日常的なやり取りの場合、意味が正しく伝わるのが最優先され、実際に用いた表現に注意が向くことはあまりない。伝えること自体が成功すれば、別の表現に変換して構わない場合も少なくない。つまり、意味ないしは意図が表現に先立つのである。一方、詩では表現が意味に先んじる。もっと言えば、意味に還元されない表現の余剰性こそが詩の本質なのである。たとえば、詩を読んでもピンと来ないというような感覚は、それと深く関わっている。

一つ例を挙げてみよう。次の詩は子ども向けのものとしては定番のロバート・ルイス・ステューヴンソンによる「ブランコ (The Swing)」という詩で、*Sunshine*は最近の改訂で、新たに3年生用の教科書に収録している(133)。これは、内容的には幼年期の子どもに適していると思われるが、比較的やさしい文法や語彙で書かれ、詩形も英詩によく見られるものの一つであることから、手頃なサンプルとして選ばれたのだろうと思われる。

How do you like to go up in a swing,
Up in the air so blue?
Oh, I do think it the pleasantest thing
Ever a child can do!

Up in the air and over the wall,
Till I can see so wide,
Rivers and trees and cattle and all
Over the countryside—

Till I look down on the garden green,
 Down on the roof so brown—
 Up in the air I go flying again,
 Up in the air and down!

この詩の要点は、第1連の後半の2行にある通り、ブランコで空中高く昇ることが子どもにとって最高の楽しみであるということである。もしこの詩全体を一つのパラグラフのように捉えるならば、ここが主題文に当たるだろう。その前の2行は、この詩の想定読者である子どもに対する呼びかけとなっている。また、第2、3連は、ブランコに乗ることの魅力を詳述している支持文と見なせる。さて、ここで“I”として言葉を発している人物は誰であろうか。第2、3連でこの人物の視点から見えるものを挙げていることから、ブランコに乗っている子どもであると考えられる。しかし、第1連、特にその後半2行の語り方は、子どもが子どもに語りかけているというよりは、子ども時代に出来ることを一通り経験した大人が自分の意見を子どもに話しているような印象を与える。もし“I”が架空の子どもというペルソナではなく、この詩を書いたスティーヴンソン自身（この詩を含む詩集の出版時は34歳）とするなら、彼が昔ブランコに乗ったときの記憶を思い出しながら、そのときの子どもになり切って語っているというのが自然な解釈であろう。第2、3連を二人称の視点から書くこともできたかもしれないが、一人称で語ることによって、詩人が自分の印象に強く残っていることを読者に共有してほしいという願いが表されているように思われる。ところが、肝心の経験の記述そのものは、乗っているときの感覚を詳らかにするのでもなく、一般的に詩に期待されがちな情感あふれる表現を用いるのでもなく、特にこれと言って個性のない田園風景のなかの存在物を名指しするだけである。そうした詩句の貧弱さを補うかのように、ブランコの往復運動しながら“up in the air”あるいは“down”を何度もリズムカルに繰り返し、読者自身がその運動に同期する想像を楽しむように誘っているところが、この詩の命と言えるのではないか。

この詩のメッセージは、ブランコは最高に楽しいという命題に還元できるかもしれない。それに比して表現には遊び、あるいは語弊があるかもしれないが、無駄が多いようにも見える。しかし、この詩を読む本当の意義は、誰もが合意する一つのメッセージだけを抽出することではなく、表現をそのまま受け止め、想像を膨らませることなのである。詩を書いたスティーヴンソン自身が実際にブランコに乗って何かを見たとしても、それを詩句に織り込んだかどうかさえ本来は問う必要がない。詩人が見たものは、詩の表現をもたらしたきっかけにすぎないからだ。詩の「真意」を勝手に決めつけ、それをもとに詩で使われている表現の是非を問うことは出来ない。詩の表現を構成する個々の言葉の善し悪しを決めるのは、論理的な一貫性や事実との一致などの客観的尺度ではなく、それらが全体としてうまく機能しているかどうかであり、その判断は、詩人自身が下したものを追認するしかない。それ以上何か言うとするれば、読み手の恣意的な判断基準で外から押し付けたものでしかない。

4. 外国語学習者の詩作

今見た例は、英語を母語とする文人の作品であり、未習熟な外国語学習者の詩を同列に論じるのは飛躍し過ぎかもしれない。しかし、ここで問題にすべきなのは、学習者が詩人、すなわち、優れた詩を書く能力を恒常的に保持している者になれるかではなく、必要に応じて適切な

誘導を与えることによって、詩の特徴を持った文章をたとえ数編でも書けるかどうかということである。誰が書いたものであろうと、詩と呼びうるものには共通の特徴を想定する必要がある。詩を書く際に、学習者はどのようなプロセスを経て最終的な表現形態にたどり着くことが出来るのかが、詩作の利用方法を検討するにあたって重要な点となる。Hanauer (2010) は、詩という形でのデータの収集・提示・分析を研究方法に取り入れることの妥当性を主張した研究書のなかで、「第二言語話者」による詩作を論拠として用いている。ここでデータとして扱われている詩は、様々な国からの米国への学部留学生によって書かれたものである。詩の作者たちは、米国の大学で授業に参加できる最低限の英語運用力 (TOEFL-PBTで500点以上) を持っている (論者は“advanced second language writers”と表現している) 上、詩の題材となりうる彼らの経験は、日本の中学生よりも豊かで多様に違いないが、彼らの詩の平均的な特徴は、意外なほどシンプルである。Hanauerのまとめによると、詩の長さは平均して10行程度で、使われている単語の大多数は使用頻度が上位2000番目までに入る基本語彙で、一人称の視点で書かれ、自分の身に起こった出来事や身近な人々との関係を描き、その時々的心情を綴ったものと言うことが出来る (51-52)。これらの特徴は、具体例を挙げることは控えるが、たとえば中嶋ほか (2006) で紹介されている日本の中学生の詩と比べても、大差がない。それどころか、むしろ後者のなかにはもっと長いものや、より抽象度が高い作品も見受けられる。また、詩に具体的にどのような単語が観察されるかに関しても、米国の留学生の詩に頻出する life, love, eyes, day, friend などの上位24語 (46-49) は、彼らの詩が身近な出来事をテーマにしていることの証であるが、その多くが日本の中学生の詩にも特徴的に見られる。たまたま収録された詩の外面だけを比較して何かを結論づけることには慎重になるべきではあるが、両者の特徴の類似性から、次のような可能性を指摘できるかもしれない。詩を読んだり書いたりした経験や訓練があまりない外国語としての英語の使用が詩を書く場合、書き上がった詩の洗練度と英語力にそれほど相関性がないのではないか。

Hanauerは、母語で書く詩人の作詩プロセスに関する先行研究や独自のインタビュー調査を踏まえ、作詩のプロセスを、活性化 (activation)、発見 (discovery)、並べ替え (permutation)、書き上がり (finalization) の四つの段階に区分していて、第二言語の詩人も基本的に同じプロセスを踏むとみなしている。このうち、「発見」と「並べ替え」については、詩が出来上がるまでに何度も往還されることを指摘している (13-30)。発見するものは、自分が詩で言おうとしている深い意味であったり、現実に対する見方だったりするのだが、これらは、詩を書き始めるときに予め見えているとは限らず、言語化することによって初めてわかるということもよくある。また、ただ自分の気持ちを未整理なまま紙の上に並べたてて終わるわけではなく、並べ替えによって推敲を重ね、これ以上改善しようがないという表現に至った (しばしばあきらめるといふ感覚を伴う) ときに詩が書き上がった状態となる。もし外国語の能力に関わらず詩が書けるというなら、これらの作業のどこかに言語の固有性に左右されない、あるいはどの文化圏の人間にも共通の思考や感情を反映したのものがあるということになる。おそらくその可能性が最も高いのは「発見」だと思われる。たとえば、親子間のつながりや人間の死すべき運命などのような普遍的なテーマを想起すれば、特に不思議ではないであろう。また、詩のタイプによっては、どこかの作業に要求される言語能力のハードルが低くなることもあり得る。典型的な英語学習者の詩は、自由な詩形で書かれた身近なものごとについての心情を述べる叙情詩的性格が強いものがほとんどである。こうしたオープン・フォームの詩は、「書き上がり」の

判断を下すための手掛かりが、クローズド・フォームよりも少なく、より主観的になると思われ、その判断と言語的な洗練度が乖離してしまう可能性が比較的高いと言えるだろう。

しかしながら、何の方向付けもなしに自由に詩を書かせた場合、上のようなプロセスを経て詩を完成させるには相当な時間がかかり、現実的ではない。次節では、詩の形式上の特徴を踏まえて、上のプロセスを簡便に体験するための方法を提案する。

5. 典型的な英詩の特徴に親しむための詩作活動

ありきたりの言葉でありきたりの思いを綴っても詩とは言えないが、詩につきものの驚きや発見は、どんなに優れた詩においてさえ、誰も聞いたことがないような言葉を使うことで生じることはほとんどない。一個人が使える語彙は限られているのだから、重要なのは言葉の組み合わせ方における創造性である。しかし、その組み合わせ方が独りよがりすぎては、読み手に伝わらず、詩としては失敗となる。言葉同士の結びつきにも様々なレベルのものがあるが、特徴的な使用方法が比較的認知されやすいのは統語法とコロケーションにおいてであろう。ほとんど現在の英語とみなしてもよい20世紀の例で言えば、e. e. カミングズの“anyone lived in a pretty how town”（同名の詩より、Kennedy and Gioia 1995, 545）は統語法において、ディラン・トマススの“once below a time”（“Fern Hill”, 同書844）はコロケーションにおいて、それぞれ意図的に通常という言葉遣いを逸脱している。これらは、逸脱しているということが理解されて初めて効果をもたらすものなので、初級英語学習者にとっては学習上の混乱を招きかねず、注意を要するものである。ほかには、言葉のルールそのものではなく、言葉が指す内容が現実世界の常識を逸脱するようなもの（たとえば、ナーサリー・ライムの“the cow jumped over the moon”）も有効であるが、こちらは、言語学習という点ではマイナス面はないであろう。

詩は表現が重要であるということは既に述べたが、これは言葉の記号としての特徴、すなわち音声を含んでいる。詩と散文の違いにおいては、ただ単に印刷のレイアウト上の違いにとどまらず、そこから生み出される、実際に声に出したときのリズムの違いが重要な位置を占めている。詩は通常改行によってリズムを作るが、安易にフレーズの自然な切れ目で改行しても、散文のリズムと際立った違いは生み出せない。これは初心者が自由詩を書く場合、特に起こりがちなことである。自然に英文を書いて行き、フレーズで切れればよいなら、意味内容ばかりに注意が行き、実際に詩の音がどれくらい効果的に響くかは二の次になってしまう。

新しい組み合わせと音声という二点にかかわって、もっと注目されてよいものに韻律がある（押韻と混同されることがあるが全く別物である）。一般に韻律に従おうとすると自由に書けなくなるという印象が持たれているが、この考え方は、書きたい内容が予めほとんど確定している場合には正しい面もある。しかし、上に見たように、「発見」は書き始めてからでも何度ももたらされるのがふつうであり、むしろ韻律という外的な要因が加わることによって、独力では得られなかったような発見に至ることが多々ある。また、詩の歴史を見ても、韻律を持たない詩が書かれていた時代のほうが遥かに短く新しいし、現在でも依然韻律は使われ続けている⁵。これは単なる書き手の自己満足の結果ではなく、数限りない読み手に対して韻律の力（たとえば、記憶に残りやすくなるなど）が効果を発揮し、詩を後世へと残すのに役立ったという事実を示すものである。とは言え、初心者がいきなり英文を書いて、相当な長さにわたって韻律を保ち続けるのはまず無理であろう。そこで、どのような韻律を用いてどのような手順で書くのが良いのか、それを行うことで何が得られるのか、詳しく検討してみよう。

韻律詩のなかでも最も際立ったリズムを持っているものが一行あたり4拍の韻文(tetrameterもしくはfour-beat line)である。これは、伝統歌やナーサリー・ライムなど、広く民衆に親しまれてきた詩に使われる韻律で、比較的芸術性の高い詩に使われる5拍の韻文(pentameterもしくはfive-beat line)とは異なり、手頃な長さで、行を二分すると同じ長さ(2拍)になることが特徴である。歌詞のようなリズム感の強い詩は、しばしば詩行を二分することがある(それによって逆にリズムが単調になるという欠点もある)のだが、初歩段階としては、一気に一行を韻律に則って書き上げようとするよりも、韻律に意識を向かわせながら短い行を作り、それを積み重ねて行くほうが取り組みやすいであろう。また、一口に韻律と言っても、いくつかの種類に分けられる。英語を用いる場合は、伝統的に強勢のある音節を基準に拍数を数え、拍と拍の間にどのように強勢のない音節(弱音節)を配置するかによって、韻律が分類できる。とりあえずここでは、厳密に弱音節の数をコントロールするタイプとそうでないタイプを区別すれば良いだろう。

詩を書き始めるにあたって、「活性化」の手段として、教科書などに見られるように、テーマやパターンを設定することは有効な方法であろう。ここで言うパターンとは、詩の内容の論理展開におけるパターンのことで、モデルとする詩作品に倣って単語やフレーズを書き手のトピックにあわせて入れ替えたり、予め指定されたカテゴリーに当てはまる言葉を埋め込んだりして、独自の詩を作るような場合が想定される。一方、韻律は「活性化」の一つの手段ではあるが、このようなパターンとは異なり、基本的には詩の内容を制限することはない。いくら韻律を決めても、それだけで何を書こうかのヒントにはならないのである。そこでここでは、使う言葉を予め提示してしまう方法を紹介する。本稿では一例として、あえて抑制的に中学一年で習う単語のリストに絞ってシミュレートしてみたい。なお付録の一覧表は、検定教科書6種の巻末の単語リストのうち、全種類が一年生でカバーしている単語だけを抜き出して分類したものである(品詞分類が複数ある単語は代表的な一つに限った)。全部で240語程度しかなく、とくに名詞の種類が貧弱で、自由に詩を書こうとすれば全く足りないと思われるだろう。しかし、上で述べたように詩は組み合わせの妙で生み出されるのであり、限られた範囲の語彙でもそれはできるはずであるし、どのような言葉を選択しどう組み合わせるかには、書き手独自の経験・感覚・考え方などがある程度反映されるはずである。ここで示すリストはあくまで一例であり、工夫次第で中身や利用法はいくらでも変化させることが可能であろう。たとえば、実際に詩の内容を左右するのは名詞や動詞などの内容語であるから、機能語やきわめて基礎的な語彙は自由に使用してよいものとして割愛し、相互に関連性のある特徴的な内容語を一定数リストアップしておけば、まとまりのあるおもしろい詩が書きやすいであろう。また、適宜学習者自身が使いたいと思う単語を加えても良い。

それでは、具体的な手順を説明して行くことにする。まずは提示したリストのなかの単語を使って2拍の一節を作る。このとき、既に論じた通り、強音節と弱音節を交互に1音節ずつ配置する方法と、弱音節の数を状況に応じて0~2音節までとする緩やかな韻律の二通りが考えられる⁶。前者の場合は、弱音節を先にする(弱強調)か強音節を先にする(強弱調)かを選択しなければならない。基本的な英単語は、単音節語や、複数の音節からなる単語でも最初の音節にアクセントがある場合が多く、単語単位では強弱調(trochee)になりがちだが、英詩で使われる韻律としては弱強調(iamb)が支配的である。これは、たとえば、a book, to play, I know, at home, get upなど、フレーズ単位では弱強の組み合わせが自然に現れやす

いためであろう。その意味では、弱強調を用いるほうがわかりやすいし、文頭の代名詞を不必要に強く発音しがちな日本人学習者にとっては、英語のイントネーションを意識する良い機会になるだろう。また、後者の緩やかな韻律を使う場合は、最初からその仕組みで書くことを目指すよりは、前者を目指しながらも意味を優先したためにうまく音節を配列できなくなった結果として許容したほうが混乱が少ないだろう。伝統歌などによく見られるこの韻律を使うメリットは、単語の選択が比較的自由になることであるが、たとえば、oh yesからand my favorite animal（下線部が強勢）まで、実際の出現頻度には差があれ、理論上は27通りの強弱の音節の組み合わせが出来てしまうため、却って「活性化」につながりにくくなる可能性がある。以下は弱強調で詩作することを仮定して話を進める。

2拍4音節の半行では、多くても4つの単語しか使えないため、それで文が完結することはまれであろう。たとえば、主語が欠けていたり、目的語が欠けていたり、名詞句や副詞句だけの固まりだったりするであろう。限られた単語のなかから発想を広げるために、まずはそういった固まりを出来るだけ数多く書き出してみることである（つまり、ブレインストーミングである）。半行を作る際には、当然ながら音節の強弱や単語の語法を把握している必要があるが、知識がおぼつかない場合は迷わず辞書を引くべきである。それによって、既知の単語の新たな語法を知るきっかけにもなり得る。そうして集まった半行のいくつかは、出来上がった詩のパーツになったり、新たな詩句の源になったりする。ここでは、有名な詩を例に考察してみたい。次の引用はロバート・フロストの“Stopping by Woods on a Snowy Evening”（Kennedy and Gioia 1995, 787）の最初の2連である。そのうち、4音節の半行としてひと固まりに捉えられる部分に下線を引く。フロストがこのような手順で詩を構想したという意味ではなく、あくまでこの方法の有効性を検証するのが目的である。

Whose woods these are I think I know.

His house is in the village though;

He will not see me stopping here

To watch his woods fill up with snow.

My little horse must think it queer

To stop without a farmhouse near

Between the woods and frozen lake

The darkest evening of the year.

これらの半行のうち、たとえば“my little horse”は比較的独立したフレーズで、主語としても補語や目的語としても使えるため、組み合わせやすい。対照的に、2行目では下線部ではなく“in the village”を一つのチャンクとするのが自然なのは明らかで、それだけを取り出せばリズムは強弱調である。そのため、“his house is in”のように統語的に不完全な半行を作ると、後ろに必要となる目的語へと切れることなくつながらると同時に、行の基調になっているリズムとフレーズのリズムが異なることで、完全に半行単位に区切れる場合に比べて単調さが抑えられる。そのほか、下線のない部分はそのままの形では最初からひと固まりで思いつきにくい、ないしは4音節の半行に分解できない組み合わせである。たとえば“and frozen lake”は一見良さそうに見えるが、ふつうなら可算名詞には冠詞類が必要なはずであり、行頭の“between”との組み合わせでやむを得ず“and”を優先的に残したと見ることができる。このように、優れた詩

作品が半行ずつに完全に分解できることはまずありえないだろう。むしろ、半行を組み立てることから入ったとしても、後からいくらかでも書き換えたり書き足したりすることができるを受けとめておけば良い。

しかしながら、初歩段階では、とにかく半行だけで詩が組み上がるかどうか試してみるべきである。この手順で、中一の単語リストからは具体的にどのようなものができるのか、例を挙げてみたい。なお、形容詞や動詞など、変化形のあるものについては、学習者のレベルに応じて適宜指示を与えれば良いだろう。

(1) 名詞句 : a baseball team, the seventh year, the nicest girl, my family, your new guitar, that running boy, an English class, a lot of time など

(2) 修飾句 : on Sunday night, from time to time, at nine o'clock, to speak about, at every school, for you to see, too hot to eat, by going home など

(3) 主語 + 動詞を含む : my brother likes, he goes to school, I know your name, she listens to, the dog can swim, you want to sing, these students read, there is an egg など

(4) 述部 : get up at six, enjoy the time, come out with it, can play it well, is doing well, can be excused, is seen again, am good at it など

(5) 疑問詞 (接続詞) を含む : when I am home, how good it is, where she is from, what day is it, who is that girl, which watch is yours, and that is all, or not at all など

この5分類は便宜的なものであり、あとで組み合わせやすいようにしておけば、どのようなパターンをいくつ用意しても良い。上の例は比較的常識的な表現にとどめたが、突飛な内容でも意味が通じれば (文法的に正しければ) 問題ない。また、特に (5) の例に目立つが、音節の強弱は単語ごとに決まっているわけではなく、代名詞や前置詞、助動詞などは、前後関係における相対的な強さによって配置が左右される。しかし逆に内容語に関しては、原則として半行中の2音節目か4音節目にアクセントが来るようにするほうが良いであろう (3音節以上の単語については、アクセントのある音節を起点に1音節ずつ交互に強弱を配置するのがこの韻律における一般的慣例である)⁷。たとえば、“the nicest girl”と最上級を使い、“any nice girl”のようにしないのは、強勢の位置を調整するための工夫である (フロストの詩の“darkest”も同じ原理がある程度働いている)⁸。

次に出来上がった半行から、文 (ないしは節または句) として文法的につながるもの同士を組み合わせる一行を作っていく (組み合わせる際には、代名詞や動詞の時制や数などを適宜変えても良い)。このようにボトムアップ式に組み立てて行くと、ユーモアや驚きの要素が出てくるのが期待できる。たとえば上の例からだけでも、“My brother likes the baseball team”, “The nicest girl can be excused”, “He goes to school from time to time”, “I knew your name at nine o'clock”, “There is an egg to speak about”, “When I am home, I want to sing” など、いくらかでも考えられるし、最初の組み合わせは“The baseball team my brother likes”のように関係代名詞節を伴う名詞句とすれば、一行で完結せずに、前後の行と文としてつながる可能性が広がる。そして、これらの行を好きなだけ連ねて行けば、形の上では4拍の詩が出来上がる。ただし、全くランダムに組み合わせただけでは意味不明な詩になるだけだろう (それも一興ではあるが)。どう並べれば全体がうまくつながるかじっくり吟味することが、良い詩にするためにも、英語学習上も、大切である⁹。たとえば、今挙げた例から4つを組み合わせると (脈絡が浮かびやすいように代名詞を変える)

The nicest girl can be excused;
 She goes to school from time to time.
 She knew my name at nine o'clock;
 When she is home, she wants to sing.

のようになる。この“girl”とは誰かというような議論をすればおもしろいだろう。用意できた詩行が多ければ多いほど出来上がった詩の明快さが増す可能性が高まるであろうが、それでもうまく行かない場合は、フロストの例で見たように、後から詩の流れに沿った詩句を新たに書き足して行くという発展的段階に進むのも良いであろう（場合によっては韻律を崩しても構わない）。また、このようなタイプの詩では韻を踏むことが常套であるが、リストのなかの単語同士（動詞の活用形も含めて）だけでも、韻を踏める組み合わせはかなり含まれている（たとえば、play/day, boy/enjoy, look/took, knew/tooなど）。言いたい内容が固まったなかで韻を探すのでは限られた選択肢しかなくなるが、先にパーツを用意して行くという方法では、韻を踏むことは比較的容易である。

この方法では本当に書きたいことが書けないという批判がありそうだが、外国語よりもはるかに自由に扱えるはずの母語で書いても、うまく書けない、つまり自分が本当に書こうとしている表現にたどり着かないという感覚は、おそらく誰もが経験することであろう。ならば、最初から何を書こうとしているのかを視野に入れなくておいたらもっと楽になるはずである。詩は決して結論から発展して行くわけではない。一つの何気ない表現から詩が生まれることはいくらかでもある。ここで提示した方法は、あえてそれを促すものである。この方法のメリットとしては次のようなことが挙げられるだろう。

- (1) 基本的には与えられた単語を組み合わせるだけなので、詩を書くことに対する心理的抵抗感が取り除かれ、気負わずに取り組める。
- (2) 日本語で書いてから英語に直すといった、本来詩で行う必然性のない作業に陥ってしまうことが防げる。
- (3) 既習の語彙を使えば、語法に習熟するきっかけとなる。
- (4) 組み合わせを考える際に、構文に注意が向く。
- (5) 英語のプロソディに対する感覚を磨くことが出来る。
- (6) 個人ですべての手順を行うことも、集団で作業を分担し、共同で詩を書き上げることもできる。
- (7) 時間をかけずに、また内容に関わらず、詩の形式的特徴を持った作品が書けるし、気軽に改良していくことも可能。
- (8) 使う韻律や詩形にも依るが、書いた作品は簡単に既存のメロディに乗せて歌うことが出来る。

6. むすび

詩を書くことのメリットは、創造的な言葉の使い方が出来るということである。外国語で詩を書く活動を効果的に行おうとするなら、それが具体的に何を指しているのか（どのような詩をどのように書くのか）、外国語学習にどのように役立つのか（外国語の知識のどの部分を刺激し、書くこと一般とどう棲み分けが図れるのか）を吟味し、適切に方向付けることは重要である。ただ単に気持ちを述べることと詩を書くことは同じではない。詩は心情の吐露であると

というような短絡的な考えを暗黙の前提とするのは、却って詩の可能性を損なうことになりかねない。本稿で注目した韻律を使うことは、ほぼ詩を書くこと以外に用途はなく、言葉そのものへと注意を向けることにつながり、詩を書いていることを実感しやすい。今回紹介したのはあくまで導入方法の一例であり、決して韻律を用いた作詩法に習熟させることを意図したものではない。しかし、自分で書くことで韻律のあらましを実感すれば、様々な韻律で書かれた詩作品や歌詞に出会ったときにより興味がわくであろうし、英語のリズムと韻律が深く関わっていることに目が開かれるであろう。

注

1. 山本（2009）は、中学生でも韻律に関して興味を抱き、ある程度その原理を理解することができるという報告をしている（90-92）。ただし、詩作活動にも触れているものの、その際には韻律を使ったわけではない。
2. ただし詩と中間言語の親近性を指摘する論もある（Parkinson and Thomas 2000, 45-47）。問題は、中間言語を中間言語と認識できるかどうかである。
3. 実際この詩のパターンは、Holmes and Moulton（2001）が紹介している cinquain とほぼ同じものであるが、著者たちはこの形式の特徴として、完全文を用いないものであること、パターンに当てはまる名詞、形容詞、分詞といった文法項目の理解に役立つであろうこと、短いなかにも収めるために最適な言葉を選んで無駄のない表現（economy of expression）をさせる必要があるということを指摘している（67）。
4. たとえばEagleton（2007）は適切な例を引きながら手際よくまとめている（41-47）。
5. このこと自体は常識だが、Baer（2006）が示している年表（8-9）は、それをひじょうにわかりやすく表している。
6. 強勢を2音節の弱音節で隔てる triple meter も決して珍しくはないが、初心者を使うには現実的ではない。
7. 弱強調では、リストにある4音節の単語は実質的に使えないことになる。
8. 単音節の内容語を隣り合わせに並べることも出来るが、複雑な韻律の解釈（たとえばWallace 1996, 26-28；Carper and Attridge 2003, 82-83）を提示する必要があるが生じるのであれば、避けたほうが良いであろう。
9. Widdowson（1992）は既存の詩を使って詩行を並べ替える同様の活動を紹介し、文学的能力と言語能力一般が相互に依存し合っていることを強調している（92-101）。

参考文献

1. 中学校検定教科書

Columbus 21 English Course. 東後勝明ほか編著. 光村図書, 2012.

New Crown English Series New Edition. 高橋貞雄ほか編著. 三省堂, 2012.

New Horizon English Course. 笠島準一ほか編著. 東京書籍, 2012.

One World English Course. 松本茂ほか編著. 教育出版, 2012.

Sunshine English Course. 新里眞男ほか編著. 開隆堂, 2012.

Total English. 矢田裕士ほか編著. 学校図書, 2012.

2. その他

- Baer, William. *Writing Metrical Poetry: Contemporary Lessons for Mastering Traditional Forms*. Cincinnati: Writer's Digest Books, 2006.
- Carper, Thomas, and Derek Attridge. *Meter and Meaning: An Introduction to Rhythm in Poetry*. London: Routledge, 2003.
- Eagleton, Terry. *How to Read a Poem*. Oxford: Blackwell, 2007.
- Hanauer, David Ian. *Poetry as Research: Exploring Second Language Poetry Writing*. Amsterdam: John Benjamins, 2010.
- 原田昌明. 『「ことばを遊ぶ」英語指導－中学校から大学までの教育実践』. 研究社, 2005.
- Holmes, Vicki L. and Margaret R. Moulton. *Writing Simple Poems: Pattern Poetry for Language Acquisition*. Cambridge: Cambridge UP, 2001.
- Kennedy, X. J. and Dana Gioia. *Literature: An Introduction to Fiction, Poetry, and Drama*. Compact Edition. New York: HarperCollins, 1995.
- 丸山 修. 「中学校英語教科書における詩の扱い」. 『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）』39（2008）：171-184.
- 三浦 孝・弘山貞夫・中嶋洋一編著. 『だから英語は教育なんだ－心を育てる英語授業のアプローチ』. 研究社, 2002.
- 宮地信弘. 「英語の授業における英詩利用に向けて」. 『三重大学教育学部研究紀要』51 教育科学（2000）：65-98.
- 中嶋洋一・幸若晴子・大津由紀雄・柳瀬陽介・佐藤礼恵. 『15－中学生の英詩が教えてくれること－かつて15歳だった全ての大人たちへ』. ベネッセコーポレーション, 2006.
- Parkinson, Brian, and Helen Reid Thomas. *Teaching Literature in a Second Language*. Edinburgh: Edinburgh UP, 2000.
- 『中学校学習指導要領解説－外国語編』. 文部科学省編. 2008.
- Wallace, Robert. “Meter in English.” *Meter in English: A Critical Engagement*. Ed. David Barker. Fayetteville: U of Arkansas P, 1996. 3-42.
- Widdowson, H. G. *Practical Stylistics: An Approach to Poetry*. Oxford: Oxford UP, 1992.
- 山本玲子. 「中学生の豊かな言語産出能力を育成する実践的研究」. 『京都教育大学教育実践研究紀要』9（2009）：87-95.

付録

	人称代名詞	数量詞/冠詞/指示代名詞等	数字・基数/序数	疑問詞	名詞(身近な人)	名詞(動物)	名詞(時季)	名詞(学舎)	名詞(スポーツ/娯楽)	名詞(その他)	形容詞	副詞(時)	副詞(その他)	be動詞/助動詞	動詞	前置詞	接続詞	間投詞
単音節	he, her, hers, him, his, I, mine, my, our, ours, she, their, them, they, us, we, you, your, yours	a, all, an, much, some, that, the, these, this	eight, eighth, fifth, first, four, fourth, nine, ninth, one, six, sixth, ten, tenth, third, three, twelfth, twelve, two	how, what, when, where, which, who, whose	boy, friend, girl	cat, dog	day, June, March, May, month, night, time, week, year	book, class, pen, school	team	bag, bed, cap, egg, house, lot, lunch, name, watch	big, dear, good, hot, last, long, new, nice, sure	now, then	here, no, not, there, too, up, well, yes	am, are, be, can, come, do, eat, get, go, have, know, let, live, look, make, meet, play, please, read, run, see, sing, speak, start, swim, take, talk, thank, want, write	at, by, from, in, of, on, to, with	and, but, or	hi, oh, wow	
二音節		any, every, many	eighteen, eighty, fifteen, fifty, forty, fourteen, hundred, nineteen, ninety, second, seventh, sixteen, six, thirty, twenty		brother, father, mother, sister		April, August, Friday, July, Monday, morning, summer, Sunday, Thursday, Tuesday, Wednesday, winter	student, teacher	baseball, CD, guitar, music, picture, soccer, tennis, TV	birthday, breakfast, Japan, Mr., Ms.	English, sorry, welcome	again, o'clock, often, sometimes, today	very	enjoy, excuse, listen, study	about, after		hello	
三音節			eleven, eleventh, seventeenth, seventy		family	animal	afternoon, December, November, October, Saturday, September		basketball, piano		beautiful, favorite, Japanese	yesterday	really					
四音節							February, January				interesting							